まほう戦士ビュー
と
まほう妖精サン

haru

ここは、しずかな村。小麦畑がどこまでも広がっています。

村のお父さんたちは、畑でのしごとをおえて、お茶をのみながらひとやすみ。

村のお母さんたちは、その小麦で、おいしいパンをたくさんやいていました。

この村でできるパンはとてもおいしいので、ほかの村や街からも買いに来る人がたくさんいるほどでした。

その村には、こどもたちもたくさんいました。

毎日、川でおよいだり、森で虫をつかまえたり、花をつんでかんむりをつくったり。川や森や原っぱでたくさんあそんでいました。

そんななかで、とくべつなかよしの女の子がふたりいました。おてんばのビューと、おしとやかなサンです。

ふたりには、ひみつがありました。

じつは、ふたりは、まほう使いだったのです。

村にあらしがおとずれようとすれば、ビューはまほう戦士(せんし)になって、風のまほうで、あらしをふきとばします。

村に雨がつづくと、サンはまほう妖精(ようせい)になって、太陽の光で、村をてらします。

そうやって、村をまもってきたのでした。

ある日、みんながねむっている夜中(よなか)に、悪(あく)のかいじゅうワルワルが村にやってきました。

よなか

　ワルワルはとてもこわいかいじゅうでした。夜中(よなか)に村や街をおとずれては、畑も家もすんでいる人たちも、ぜんぶ食べてしまうのです。

　ビューとサンはすぐにワルワルのところへかけつけ、まほう戦士(せんし)と、まほう 妖精(ようせい) にへんしんしました。

　まず、ビューが、すごいいきおいで風をふきつけました。でもワルワルはびくともしません。

　つぎにビューは、風のてっぽうで、ワルワルをうちました。それでもびくともしません。

　そこで、ビューはさいごのしゅだん、タイフーンになって、からだごとぶつかりました。

　ワルワルはそんなビューをわらってみおろしていました。

「わはは。そんなわざで、おれさまをたおすことができると思っているのかい。」

　ビューはつかれはててしまいました。

　そこで、サンに 交代(こうたい) しました。

　サンは、光のまほうを使わずに、ワルワルに話しかけました。

「ワルワルさん、あなたはどうして、村や街を食べるの？」

　ワルワルはこたえました。

「おいしいからさ。」

「あなたのおなかの中には、食べられた人たちの悲しみがたくさんつまっているわ。それでもおいしいの？」

「それがおいしいのさ。」

「でも、ワルワルさん、あなたのかお、ぜんぜんたのしそうには見えないわ。」

「なんだと！」

「目はつり上がっていかりにもえて、口は耳までさけて、歯は大きなキバになって。」

「それがなんだというんだ。」

「どうしてそんなすがたになってしまったの？」

「・・・」

「ワルワルさんも、きっと、悪(あく)のかいじゅうになる前は、いい人だったんだと思うわ。

それが、こんなかいじゅうのすがたになるなんて、きっとなにかあったにちがいないわ。」

ワルワルはだまりこんでしまいました。

そして、話しはじめました。

「オレは、ある村ではたらいていた、ふつうの男の子だった。

でも、おとなしかったから、みんなにいじめられて、だれもいっしょにあそんでくれなかった。

すると、ある日、まっくらやみの世界(せかい)から、ひとりのあくまが来て言ったんだ。

『いじめられて、つらいだろう、くるしいだろう。悪(あく)のかいじゅうワルワルになって、みんなを食べてしまえ』ってな。

オレは、いじめられて、本当にくやしかったから、すぐその話にのった。

そして、いじめっこたちのいるオレの村をぜんぶ食べてやった。

はじめはおいしいとは思わなかった。でも、しばらくすると、おなかがすいてきて、村や街を

食べずにはいられなくなった。

　今もおなかがすいてたまらない。おまえたちの村をぜんぶ食べてやる。」

「そうだったのね。もともと食べたくて食べていたわけではないのね。」

「おなかがすくと、あくまが出てきて『こんどはあの村をねらえ』という。オレはそのとおりにしてきただけだ。」

「そんなことしていて、心はくるしくないの？」

「村や街を食べないと、オレがしんでしまう。」

「そんなことないわ。あなたは、もとの男の子にもどることができる。」

「なに、どうするというのだ。」

「わたしの光のまほうで、あなたの中にいるあくまをおい出してあげるわ。」

　そう言うとサンは、とてもまぶしい光になって、ワルワルをてらしました。それはそれはまぶしい光でした。

　サンは、自分の力をぜんぶつかいはたすまで、ワルワルをあたたかい光でてらしつづけました。

　すると、ワルワルの中から、大きな黒いものが出てきました。あくまでした。

　あくまは、サンの光がまぶしくて、まぶしくて、くるしがっていましたが、そのうちに黒い色がきえて、白くなっていきました。

　そのとき、ワルワルのおなかから、いままで食べてきた村や街がぜんぶ出てきました。

　そして、大きなかいじゅうのすがたがスルスルと小さくなったかと思うと、もとの男の子のすがたになったのです。

　ワルワルは、もとの少年ヨッシにもどった自分のすがたにびっくりしました。

　あくまも、なんと白い天使（てんし）のすがたになりました。

　サンは、光をてらしてつかれていたけど、言いました。

「もともと、わるい人なんて、いないのよ。

　なにかわけがあって、いかりでいっぱいになってしまうんだわ。

　そうならないようにするには、自分も強くなければいけないけれど、わたしとビューみたいに、いい友だちをもつことも大切だと思うの。

　これからがんばってね。」

　ヨッシは言いました。

「サン、本当にありがとう。

　これからは、いい友だちをがんばってつくって、いかりや、かなしみだけでいっぱいにならないようにがんばるよ。」

　天使（てんし）も言いました。

「ぼくも、いかりやかなしみでくるしむうちに、いつのまにかあくまになっていたんだ。

　これからは、みんなのよろこびやたのしみのために、天使（てんし）としてがんばるよ。」

　そうして、ヨッシと天使(てんし)は、ビューがつくった風にのって、もといた村にもどっていきました。ワルワルが食べてきた人たちも、風にのって、村や街へもどっていきました。

　ビューはサンに言いました。

「話をするってたいせつなことなんだね。

　わたしは、わけも聞かずに、『悪(あく)だ』と思ったから、こうげきしてしまったけど、ぜんぜんだめだった。

　でも、サンがいろいろ話をして、わけを聞いたら、光をてらしただけでかいけつした。

　わたし、とてもたいせつなことを学んだ気がするわ。」

「ビューは、いままでも、風の力で村を守ってきたじゃない。

　またふたり、力を合わせて、がんばりましょうね。」

　夜が明けてきました。村ではいつものように、畑がたがやされ、おいしいパンのにおいがたちこめていました。